

## 特別展「化石どうぶつ園」での新しい試み

おしまみつはる  
大島光春（学芸員）

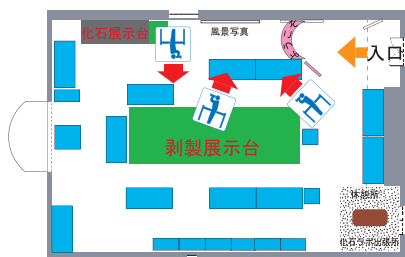


図1 展示室のレイアウトとビューポイントのサイン。水色は展示ケース。



図2 壁に貼られたホワイトリバー パッドランドの写真を背景にしたアルケオテリウム化石。

当館ではただいま特別展「化石どうぶつ園ー北アメリカ漸新世の哺乳類ー」を開催中です(2005年7月16日～11月6日)。この内容については、展示や図録でご覧いただくことにして、ここでは特別展の中で取り組んだ展示方法の目指したものと試みについて説明します。

### 目指したものー楽しさが優先ー

今回目指したのは、子どもから大人まで「いろいろな楽しみ方ができる展示」です。解説文を読めばより深く楽しめますが、見るだけでも楽しいということを大切にしました。少なくとも「楽しそうな」雰囲気作りはできたと思っていますが、いかがでしょうか？

### 展示の試みーテーマパークに学ぶー

アトラクションだけでなく、パレードや場内の雰囲気作りで来園者を引きつけるテーマパークがあります。博物館ではお金をかけることはできませんし、楽しさの中にも節度が求められるので、真似をすれば良いというものでもありません。私なりに考えた結果、①導線を入り組ませて長くする、②見る方向や角度を変えるなどして、一つの物に複数の登場機会をあたえる、③近景、遠景など、一つの視

野に複数の要素を盛り込むこと、を試みることにしました。

- ・入り組んだレイアウト(図1)：剥製の行進を展示する島を中央に設け、壁と島の間に大型展示ケースを配置して、横(南北)方向の通路を4本にしました。
- ・展示ケースの仕切りを取る：通常、大型展示ケースは仕切りを入れて、両面から異なる標本を見られるようにして使いま



図3 アルケオテリウム化石(手前)と同じ視野の中にイボイノシシやニホンイノシシの剥製(奥)を見ることができる。化石標本には黒い台が、現生標本には緑の台が使われている。



図4 吹き出しを使って標本に語る。標本を身近に感じてもらい、かつ、解説パネルの字数を減らす作戦。

すが、今回はこの仕切りを取り払いました。そのことで、標本の背景に山地の風景を取り入れる(図2)こと、手前(ケース内)の化石と後ろ(ケース外)の剥製を1つの視野に納める(図3)こと、両面(例えば左右)から標本を観察する(図2,3)ことができるようになりました。また、導線を入り組ませたことで幅が狭くなった通路を実際より広く見せることもできています。

### 試みを生かすために

企画者(化石どうぶつ園の飼育係)の意図を汲んでご覧いただくために、展示の楽しみ方を説明するパネルを入り口付近に設置しました。また、入園者の視点

を誘導するために会場内3カ所の床にビューポイントのサインを付けました(図1)。サインの上に立ち、赤い矢印の方向を見ると(図2)、そこがビューポイントである理由が、解説なしにわかっていただける…と、思っています。

### 楽しさの演出

レストランの窓からつり下げられた垂幕、入口を入るとすぐにある「化石どうぶつ園」のアーチ、開放的な空間に浮かぶ復元画のパネル、展示室中央を行進する剥製たちなど、化石の特別展ですが、化石以外のものが楽しさを盛り上げてくれます(図6)。

これからも「博物館は楽しい」と感じていただくために、学芸員に何ができるかいろいろな機会に試していきます。



図6 明るく楽しい雰囲気の特別展示室。

自然科学のとびら

第11巻3号(通巻42号)

2005年9月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館

館長 青木淳一

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

編集 大島光春

印刷所 文化堂印刷株式会社

自然環境保護のため、再生紙を使用しています。

R100